第4分科会

第3分散会

Ⅰはじめに

今年の大会スローガン、第4分科会の討議の柱、2日間の日程を確認し、1本目の報告に入った。

Ⅱ報告及び質疑討論の概要

－報告 1-⑫－

「誰もが元気になれる中友」をめざして

（奈良県人教）

中学生に「生きる意味がわからん」と言わせてしまう世の中、この子たちの生活の背景にあるしんどさに寄り添いたい。大人たちへの不信感から荒れる子どもたちのための居場所をつくりたいと考える大人たちで、2015年中学生友の会を設立した。「しんどい」という共通項でくくれるものの、その中身は一人ひとり違い、必要な支援も、解決に至る道筋もすべてちがう。子どもたちのしんどさの背景には部落差別が存在している。大切にしているのはいつでも「おかえり」といって迎えること。先生たちには、学校で見せない子どもの顔を知ってほしい。この先の人生で困ったことがあったとき思い浮かぶ顔になれるよう、日々悩み、試行錯誤の毎日だが、保護者、地域と教育現場をつなぎ、育むことをこれからも大事にして続けたい。

-主な質疑と意見-

大分　あってほしくないことだが、教室に子どもたちの居場所がなくなっているのか。学校が行きづらい場所になってしまっているのか。居場所づくりのヒントや卒業後の子どもたちについても知りたい。

報告者　家の前を通る子どもの元気がないと気になるから先生に聞く。先生は地域での子どもたちの様子を知りたい。それなら一緒にやろう、みんなで連携して育てていこうと、「中友」は自然な形でできた。メンバーは、運動体や教員など、それぞれにベースがありスムーズだった。中友が学校での居場所づくりにも重なっている。子どもたちは高校に入学するとムラの仲間のいない環境で生活することになる。なので、中友で差別に気づく力、差別に立ち向かいながら人とつながる力、ともだちにそれはおかしいと言える力をつけさせたいと考えている。

京都　自主夜間学校をしている。今日入試に送り出した一人の少年のことを思い浮かべながら聞いた。その子はもともと貝みたいにしゃべらない子だったが、安心できる場所で学び、やっと入試までたどりついた。子どもの変化はどのようにして起こるのか、居場所とは一体どういうところだと思うか。

報告者　中友は部落の中ではなく大正中校区の公民館で行っていて、誰がきても OK としている。となりのおっちゃんもおばちゃんもみんな先生。卒業生もゲストティーチャーとしてきてくれる。どこで「がんばろう」と思えるようになるかは一人ひとりちがうと思う。

奈良　大正中校区で学校、保護者、地域がどうしてこんなにうまくいっているのか自分なりに考えると、大正中に在職していたとき、中友に来てほしいと言われ、いろいろとできていない事実に緊張して訪れたら、「おかえり」と言われて迎えられた。そして、今も気にかけてくれている。いい意味で垣根がない。そして、一人ひとりの生き方がかっこいいと思う。

－報告2-⑨-

「支部の藍染　海を渡る」　　（宮崎県人教）

「太陽と緑の国、神話のふる里、宮崎県には差別はない。だから部落差別もない」という認識のもと、宮崎県では他県から遅れること 7 年、1976年にようやく同和対策事業が始まり、1978年に教育集会所が設置された。現在、支部員や子どもの数の減少により、学習講座や識字学級は開かれなくなっている。1986 年の不祥事などもあり、行政からの補助金が打ち切られたこともあって、県民の理解が得られる運動、そして活動資金を自分たちでつくろうと藍染に取り組むことになった。えびの市の加配教員という立場で、最初は義務感から参加していたが、だんだんと楽しい、会いたいという気持ちになった。そして、知り合いにも声をかけるようになった。藍染教室に参加した ALT の2人は、「尊敬すべき藍染の先生方がいわれのない差別を受けるのは理解できない」と感じていた。2人は、その後藍染をもってそれぞれの故郷に帰った。藍染教室は、水平社宣言にあるような、まさに人間を尊敬することによって、差別をなくしていく活動と思う。

-主な質疑と意見-

大阪　報告要旨には氏名とあるが発表では「なまえ」と言われた。海外ルーツのある人を排除したり、天皇制につながるものと理解されて変えられたのか。

報告者　勉強不足で違和感なく使っていた。

大分　文字を書くだけが識字ではない。自分を見つめたり、反差別の思いを培うような取組はあったか。藍染という自分たちの文化を持つことは素敵だが、そのことの意義を参加者はどうとらえているのか。

報告者　参加されるみなさんは、誇りをもって取り組まれていると感じている。

京都　教師生活で大事にしてきたことは、一人が変わることで、その周囲が変わり、教師も変わること。この大会に長く参加し、はじめは報告者のまねだったかもしれないが、少しずつ自分のものにしてきた。義務感で参加していた先生がどう変わっていったのか、藍染の活動をとおして、まちはどう変わったのか聞きたい。
報告者　学校でしっかり部落問題を教えていくことが、教えていただいたことへの還元になるのではないかと思い、自分なりにワークシートなどをつくり、市内の小学校に広げている。また、市民に活動が理解されてきていると感じているが、集会所になるべくたくさんの人に訪れてもらい、感じ取ってもらうことが大事だと思っている。
奈良　支部の方に応えるための活動というのは、部落差別はムラの人だけががんばる問題ではないし、住みよい社会をつくるのはみんなですることで、「自分もゆたかに生きていくための取組として、一緒に差別をなくしていこう」ではないのか。
大阪　ずっと学びはあるはずなのに、（識字学級で取り組んだ書道で）段を取ったから識字の役割は終わったというのはどうなのか。若い子が調理師免許取得のために漢字を習いに来ることもあるし、私自身、70 歳を過ぎてから、近所の聴覚障害の人とコミュニケーションを取りたいと思い手話の勉強を始めている。識字って、そういうものではないか。関東で使われている『なまえ』を表す手話も拇印を押すしぐさなので問題があると思う。

－報告 3-⑪-
「識字運動はみんなのもの」
～事業「料理とおしゃべりを通して識字学級を知ろう」を通して～　　（大阪市人教）

現代的識字の課題として、海外ルーツの人や不登校状態の人など学習者層の変化が挙げられる。ただし、対象者が変わっても変わらないものとして、自分の生い立ちや被差別体験を振り返り、考え、綴り、何ができるかまた考え、行動していくことがある。以前読み書き交流会を開催した時、その場で部落差別発言があり、実態や意識調査、そしてその分析の必要性が浮かんできた。「料理」を事業に組み込んだのは、グループで作業しながら進めるので、普段話さない人とも話をするし、どうすればわかりやすく伝えられるかを考えることも学びの効果が高い。料理の後は話を聴く時間にしているが、これまで自分のことを話すことがなかった一人が、被差別体験を語った。それまでその教室では、学びが優先で、語れる雰囲気ではなかったのだと思う。ただ、ここで聞けてよかったねで終わるのではなく、どんな教室をめざすべきか考え、再点検することが重要と考えている。まだまだ一般の人に知られていないため、事業の実施にあたっては、「教室は第2の家族」という教室紹介のリーフレットも作成した。また、年に1回、くらしや生い立ち、悔しかったことなどを綴った文集を作成している。識字運動は、社会を見つめ直し変えていく、みんなのもので、みんなに必要な学びと思う。「自分で日本に働きに来たんだろ、自分で学べ」というような自己責任モデル、「困っている人は助けなきゃ」という思いやり、やさしさの福祉モデルではなく、「なぜ識字教室に来なくてはならなかったのか」という権利の問題として考える人権モデルとしての営みを思いだし、進めていくことが重要であると考え進めている。

-主な質疑と意見-
京都　人権モデルで進めていきたいと思っているが、最近の生徒は学んだらすぐ帰っていくので、みんなで集まって何かをするのがむずかしい状況である。それでも近々茶話会を設ける予定である。その中でイラン人の家族が3人で音楽の演奏をしたいと申し入れてくれたり、それを聞いた帰国子女の、さきほど今日受験に行っていると紹介した子が、それなら自分が通訳をすると名乗り出てくれたりと広がってきている。識字というのは、長い取組だが、今でも次は何をしようかと考え続けている。これからもこんな風に続いていくのではないか。
大阪　大阪市の識字と日本語教室のコーディネーター会議の資料の中に日本語指導への個人的な思いが書かれている文章が入っていた。日本語指導の大切さについて書かれている最後に「アメリカ社会の中でも外国人が文化を破壊した。治安も悪くなった。日本もそうならないよう、日本語、日本文化を守るためにやっていかなくては…」というようなことが書いてあり、その場で、「この文章はおかしい。日本の識字の思いとはちがう。これは回収しなくてはいけないのでは」という意見が出された。いろいろな考えの人が集まる中で、こういった意見をもつ人にひっぱられていく可能性もある。納得しつつその後、自分が住むマンションのごみ捨て場でマナー違反があったとき、エレベーターで出会った住民の東南アジア系の人をみたとき「この人がやったのでは」と思ってしまった自分がいて、これは同じ意識なのではないか、絶えず自分の差別性を確認する、折に触れ自分を見つめ直す必要性を感じている。
大阪　外国からきた人への差別がある。日本の中には部落差別がある。その部落の中にも、金持ち・貧乏、賢い・頭悪いといった差別がある。信頼関係がないと、自分を語ることはできない。子どものころ十分に食べることができなかったから、自分が稼ぐようになってからは、そのお金でおなか一杯食べているし、交流会では、ムラにある昔ながらの食べ物をみんなにたくさん食べてもらった。今も部落差別があるが、これからも、隠すことなく、隠れることなく、死ぬまで堂々と生きていきたい。
大阪　自分には在日・部落・沖縄のルーツがあり、ダブルネームを名乗っている。人権モデルについて、もう少し詳しく説明してほしい。
協力者　人権モデルについては、明日の総括討議

の中で、説明をお願いしたいと考えている。それぞれの取組とつなげて考えていきたい。

1日目総括討議

熊本 「中友活動」について、子どもたちの生きづらさの背景に部落差別があるという話を、もう少し詳しく聞きたい。

報告者（奈良） 保育士時代、人権保育の勉強会で、「目の前の子どもをどうやって育てていきたいか」を考えるとき、その子だけを見ていてはダメと教わった。オムツを換えてもらえず、朝ごはんも食べさせてもらえないまま来る子の家庭には、学生時代勉強ができず、仕事が見つからない母がいて、さらに、その母には、夜遅くまで母も父も内職で仕事をしているので柱にひもでくくられ危ないところに行かないようにされて育った母親（保育園児にとっての祖母）がいる。自分の話なんて聞いてもらったこともないし、勉強を教えてもらったこともない。ただただ生きるためにずっと働いてきている。その一方には、毎晩絵本を読んでもらい、保育園の話をいっぱい聞いてもらえる子どももいる。「ムラの子は低学力」と言われるし、実際そうだと思う。でも、その子の家庭環境をみたとき、その子だけの問題ではないと思う。一生懸命生きてきたことはわかるけど、子どもにはかかわれていない。「もっと本人が頑張ればいいじゃん」と思われる人もいるかもしれないし、「現に頑張ってる人も、勉強できる人もいる」と言われるかもしれないが、人は自分が育ててもらったようにしか育てられない。自分自身、子どもとどんなかかわりをもてばいいかわからなかったなか、大切なものを少しずつ教わっていった。

福岡 30数年前、初めて全同教大会に参加した。運動にかかわって自分がどちら側に立っているか点検を忘れないこと、取組を運動につなげることを学んだ。仕事で関わるという姿勢は、水平社宣言でいうところの「いたわるかのごとき」接し方に陥りやすく、「なにを」「なんで」問われたのか、悩むこと、考えることがなくなってしまうのではないか。運動の成果と今の社会の関係をきちんと学んでつないでいかないと、またどこかで同じことが起こってしまうかもしれない。今、子どもたちと学ぶなかで、こんなことを伝えてくれた人がいる。その人はいつも上等なネクタイをして格好つけているムラのおっちゃんなのだが、土方仕事を手伝って汚れた格好でだれかと会うと「ドキッ」とするという。その「ドキッ」は、知っている人に汚れた格好を見られるのがイヤだと思うのは、自分が汚い恰好をしている人を差別しているのではないかと思い、「ドキッ」とするということだった。自分のもつ差別者の顔がムラの子どもの胸の鏡に反射するので、鏡を曇らせないようにしないといけないと思っている、そして、部落の子に部落の子としての誇りをもたせたいと話してくれた。筑紫野の識字は年 14 回開催している。毎回、最初に「ゆのかみ宣言」を朗読してから始めている。資料の中に「うれしい」を漢字表記している個所がある。漢字に潜む差別性の問題として、女が喜ぶと「うれしい」という意味についても考えてもらいたい。

福岡 識字学級は、県としての予算はなく、各市町村判断で行われている。筑紫野市はまだ市費があり、先生への手当も出せている。文字の読み書きができない人自体は実際減ってきているが、実態調査を行った結果、就職のためにパソコンの使い方を学びたい若者、健康に支障が出て家にいる人、忙しさと差別のためそれまで学びたいことが学べなかった人がおり、一人ひとりが学びたいことを学べる識字学級にしようと、たとえば障害のある子の「ボウリングしたい」、高齢者の「吹き矢をしたい」などの願いを聞き、現在16学科あり、月に2回、保育園児から高齢者までが集まって学んでいる。

高知 なぜ自分が発言できるようになったか考えたとき、仲間の存在、先輩からの知恵、いろんな先生とつながり、学んできたからと思う。これからも、全人同教の学びが続いていくように願っている。

1日目まとめ

3本の報告を通して、居場所づくりとつながりについて考えた。取組も、中味も、内容もちがっても、話を聞きながら悩みって一緒だなと感じた。私自身の経験で、「高友」の集まりを見ていると、参加してすぐのころは、後ろにいて何もしゃべらない子が、1、2年すると輪に加わり、自分の意見を言うようになる。それまでは「言う気になったら言ってね」と伝えるだけ。識字はみんなのもの。書けるようになっても、読めるようになっても、来て話すことで元気になる。続けるということは大事なことだと思う。続けるからこそつながる。

報告 4-⑩

「『識字学級』って何ですか？」 （高知県人教）

-冒頭、紹介 DVD を視聴-

朝倉総合識字学級は、高知市で一番遅く開設された識字学級。学校にはほとんど行かず、「バカだから笑っていればいい」と笑いながらとにかく一生懸命働いていた。部落はイヤでたまらなかったが逃げることはなかった。森田益子さんの隣で、ずっと運動に参加し、生き抜いてきた。地区外の子が一人も来ない保育園では差別はなくならないと小学校の隣に建ててもらったり、小学校にプールを設置したりする運動をしてきた。森田さんに、ある日「字を知らないのか」と言われた。それまで、文字を書かなくていいように必死で頭に入れて暮らしてきた。誰にも言ったことがなかったし、とても恥ずかしかった。識字学級開設が決まったが、「自分のことを全部さらけ出せる人に先生になってもらわないとムリだ。近藤先生ならやってみる」と言った。ノートと鉛筆を準備したが、どう使うのか、全然習ったこともないからこわかった。線を描くことから始めたが、力が入りすぎてすぐに鉛筆が折れる。涙が

出る。でも、この涙は悔しいからではなく、教えてもらえたうれしさからでた涙だ。わが子に「大丈夫」「いいよ」なんて声をかけたことはなかったが、先生にそう言われて、どんどん素直になっていった。自分の名前、子どもの名前、差別のために奪われた文字を取り戻していった。ただ、はじめは「部落差別ゆえに奪われた文字を取り戻すところ」と思っていたが、ある時、識字学級で学ぶ私たちの姿をよく見て知っている中学生が「友だちが先生に『識字学級って何？』と聞いたら、先生が『辞書で調べろ』と言うた。私は悔しかった」と泣いて飛び込んできた。それ以後、ずっと考えている。これからは「部落差別をはじめとするあらゆる差別と闘い差別のない世の中をつくるために学校と連携するための拠点」となっていきたいと思う。

-主な質疑と意見-

大阪　小中の頃のことをもう少し詳しく聞きたい。私も、学校でいい思いを全然したことがない。一生懸命勉強したのに、テストでいい点を取ると「おかしい。カンニングしたのか」と言われ、それならと、今度は名前だけ書いて白紙で出すと何も言われない。そんなことばかりだ。

報告者　同じ思いをしている人がいると知るのが、うれしいのか、かなしいのか。親は私が喘息で体が弱いのを口実に学校には行かせず、子守やかご作りをさせた。「甘口のカレールーを買ってこい」と言われても、字が読めないから「辛口」を買って帰って怒られる。テストは、友だちに書いてもらったら「学校に来ていないのに書けるわけがない」と言われる。クラスメイトからも差別される。中1で子守奉公に出て、その家の子どもを朝学校に送り出すたび複雑な気持ちになっていた。

大阪　日之出の識字教室に23年間かかわり、学校に行けなかった話をたくさん聞いてきた。相手との信頼関係をつくりながら、やっと話ができるようになったことも思いだした。男性の方が教室に通うハードルが高いように思うが、どうか。また、昨日の総括討議で「うれしい」ということばが挙げられていたが、主人、嫁、奥さんなど、自分にも気づかないうちにだれかを踏みつけていることばがあると思った。

高知　男性学習者のおかあさんが、よく公民館の講演会に来られていたので声をかけた。最初は断られたが、通うようになって「楽しい」と変わられていった。

報告者　その人は、名前は書くことができていたのだが、ひらがなの中にも覚えていない字がたくさんあり、冷や汗をかきながら、書くこと、読むことだけで精一杯で、一言もしゃべらず、笑わないため、最初は、次も参加してくれるかな、大丈夫かなといつも心配していた。

高知　中2の時、クラスメイトが先生に「識字学級って何？」と聞き、先生が「辞書で調べろ」と答えた。そのとき何も言えなかった自分への後悔が、今もずっとある。辞書には書いてない思いをないがしろにされた。その思いで、今、児童館で、子どもたちには識字学級の思いを伝えている。

大分　「辞書で調べろ」と言ったところを資料で見て、この分科会を選んだ。調べること自体はまちがっていないが、その冷たさは何なのだろうと思った。自分の中の差別に気づいたり、自分を拓けるようになったり、変わってきた子どもの姿をたくさん見てきた。そこには、憧れが自分を動かすということがあったように思う。

大阪　浅香では、部落差別についてたくさん学ぶが、識字学級についての説明はあまりなく、ただ「やっているな」という感じで、展示作品を見た子どもに「何？」と聞かれても、小中で学べなかった人が、周りの人に協力してもらって学んでいるというような答えをしていた。今、点と点が線でつながったと感じている。今後、もっと伝えていきたいと思う。

報告者　応援してくれる先生もいるが、知らない先生は意外と多い。今日のように、私たちの話を聞いて広げてくれている。

奈良　教員になった理由のひとつが、父親が字を書けないことだった。それを知らず、「小学校のプリントいつだせる？」と聞いていた。今、子どもたちに高校進学という選択肢を考えてもらいたいと思っている。

報告 5-⑬

「しらさぎ識字学級で学び、そして気づきへ」
～人とのかかわりなくして今の自分なし～
（三重県人教）

高校卒業後、就職などで、半年ほど人権センターへ行っていなかった。20歳のころ、NPO の活動に参加し始め、「識字でパソコン習ったら就職にも役立つ」と言われ、21歳でしらさぎ識字学級に入った。ある日、小学校３年生に「教えて」と言われた問題が自力で解けず、それが、恥ずかしくて悔しくて、パソコンから教科学習に切り替え勉強した。識字の時間だけでなく、空いている時間を見つけてはセンターに通い学ぶ中で、子どものころ夢をもって勉強に取り組んだり、いろいろなことを経験しながら成長できる環境に自分がいなかったことを振り返る時間にもなった。小学校2年の時に両親が離婚、父親の記憶はほとんどない。電気やガスが止まったり、母の手料理の記憶もない。食事そのものができない時もあった。生活の不安定さは、そのまま学校生活へも影響した。母自身も「家の手伝いで小中高勉強していない」ため、母に教えてもらうこともなかった。給食費を払えないこともあった。でも、そんな生活が自分にとっては『普通』だと思っていた。そんな自分の将来を心配し、「いい大人に出会い、いろんな話を聞かせたい。そして困ったら相談できる人を増やしてほしい」と願い、識字に誘ってくれた恩師がいる。その人に、「将来的には自分の暮らしや経験を振り返ってほしいと思っている」と言われた。識字での人とのかかわりから輪が広が

り、センターは今自分の居場所となっている。これからは、自分が子どもたちの居場所になりたいと思っている。識字を始めて3年ほどたってから、自分の生い立ちを振り返り始めた。それまで自分は部落差別を受けたことがないと思っていたが、当時の自分の生活の中に差別の現実があることに気づき、母も、差別により、人とかかわる機会を奪われていたことに気づいた。それから、自分と同じ思いをこの子たちにさせたくないと、自分の子どもたちへのかかわり方も変わっていったように思う。まだ、自分にとっての部落問題は何かとはっきりわかっていないけれど、これからも自分にとっての識字学級を追求していきながら、自分の人生に影響を及ぼした部落問題とは何なのか、答えを見つけていきたい。

-主な質疑と意見-

大阪　自分と重なることもたくさんあるなと思いながら聞いた。子どもの頃から気にかけてくれた地域の力の強さを、とても感じた。

大阪　子どもたちとのかかわり、先生とのかかわり、どんなことが、どんなふうに変わっていったのか教えてほしい。

報告者　差別の連鎖に気づけるようになり、困っている子どものようすに敏感になった。そのことを保護者にも伝えられるようになったし、先生たちにも「最近〇〇は学校ではどうですか？」とか「保護者との連携はどうですか」など尋ねられるようになった。

大阪　自分も親の離婚。ここには差別の問題があったようだ。その後、電気、水道が止まったりという経験をした。自分は引っ越し先の友人関係がうまくいってよかったと思っている。部落問題については、今どんなふうに学んでいるか。

報告者　識字のほかに部落差別をはじめあらゆる差別をなくす青年ネットワークという NPO の活動も行っている。子どもたちとのつながりの中で、青年が子どもたちから学ぶこともある。インターネットなどは見ずに、講演会に行ったり、識字の人の経験を聞いたり、自分の目で確かめることを大切にしている。

高知　20代という同年代の意見を聞けてうれしい。自分を語る時「地区外なのにえらいね」と言われると逆に疎外感を感じる。伊賀の子は「話してくれてありがとう」と言ってくれた。

大阪　もっと元気を出して、胸を張ってほしいと思う。いろいろな思いを持っていたが、親を看取って、この親でよかったと思った。部落差別は死ぬまで勉強が必要。子どもたちは、自分が部落民と知らず、なぜ差別されるかわからない日々の生活の中、「他地区に友だちがいるから大丈夫」と言っていた。その子どもが親となり、私の気持ちがわかるようになったという。がんばり続けるのは、なかなかしんどい。

三重　地域の同級生が多かったころから、今少子化となり「なんで隣保館で勉強しているかわからない」ということで、他地区の子も一緒に学ぶようになった。報告者の彼は、本当に自分の生活で手一杯、精一杯で、言うなら、差別と向き合うことを許されず、奪われてきたと思う。これからも、彼が彼らしく部落問題を学んでほしいと思う。

報告者　これまでは「胸張って」とか言われたら落ち込んでいたと思う。今は、自分らしくと思っている。

総括討議

高知　朝倉第2小学校は、52年前地域の運動によってできた学校。熱い思いを受け継ぎながら、人権問題に正面から取り組んでいる。これからも、学力保障、子どもの思いをしっかり受け止めて教育実践をしていく。

高知　地区のあるところは、これまで受け継がれてきたものを勉強するが、地区のないところは教科書にあることしか学ばない。教科書だけでは、自分が変わってきたのはなぜか、人との出会いや感動は学べない。教育でいかに子どもたちを変えていくか、本当にやっていこうというオーラがあることが子どもに影響すると思う。

大阪　地域のない学校への働きかけもむずかしいが、あっても学校との関係は薄れつつある。なんとか機会をつくって、年1回でもつながりをとがんばっている。文章を読んで感動するだけではなく、その文章を自分の人生にくぐらせてみて見つめていくことが大事で、それが強みになると思う。

奈良　30 数年前、荒れた学校を立て直すため、1週間休校した。その間、どうしたら学校がよくなるか、なにをどうすればいいか、徹底的に話し合う一方、「1人はみんなのために、みんなは1人のために」という大阪松原三中の集団活動に学び、部落解放研究会と障がい児の研究会をつくった。そしてこの2校にもう1校加えた3校合同の合宿を行った。参加した生徒が大正中でもやりたいと始まり、30年続いている。自分の話を聞いてもらえる、聞いた人が返してくれる、自分をさらけだせるのが、この合宿だ。子どもたちが変わっていく姿をみて、先生たちも変わっていく。先生である前に一人の人間として、どうやって子どもといっしょにがんばっていけるかを大切にしている。保育園の時からかかわりのある地域の力も大きいと思う。

高知　識字学級について、かかわるまで実はあまりよくわかってなかった。「差別によって奪われた文字を取り戻す」ということはもちろんあると思うが、仲間と出会い、自分を取り戻す場所なんだと疑問が解けた。差別をなくしていく当事者として、本務の後、識字学級の先生をするという思いやきっかけについて教えてほしい。

報告者（高知）　親の言っていることは間違っているのではないかと思いながらも、「あそこは気をつけて」、「行くな」と言われて育った。学校職員として参加した研修旅行で、ほぼ同年代の女性が、自

身の子育てとして「子どもたちが部落差別に負けないように、死を選ばないように、プールに投げ込んで自力ではい上がってくるのを待っている。水の中でもがくその苦しさを知れば、差別に立ち向かえるようになる」と話されたのを聞いて、その人と自分のちがいはなんなのかと考えた。その人を直接助けられなくても、教員として子どもたちにきちんと差別に負けない科学的認識や学力をつけ、力をつけさせることが必要だと思った。識字に通う2人との出会いで、私にできる運動へのかかわりが識字だと思った。

協力者　昨日の討議の中で、みんなで学ぶ時間を取ることのむずかしさについてもだされていたが、このあたりは、みなさんのところではどうか。

大阪　世の中に個別学習へという流れがあるようにも感じているが、なにより、まず学習とは何かというとらえの問題があるように思う。プリント、ドリルを進めることが学習なのか、人と話し、ぶつかり合うことを学習と捉えるのか。たとえば日之出の教室では、普段暮らしていてわからないことをもちより、疑問をわかちあっている。学習者にとっては、「うちの教室は勉強せんよね」と、これを学習と捉えていないところはあるが、実際は学びだ。

大阪　住吉の輪読会では、「集団で学ぶ」ことを大切にしている。曜日の違う3教室をつなぐ学びとして「人権カルタ」づくりなどに取り組まれている。また、海外ルーツのある人との学習でも、ギターを弾くなど、学習の方法を広げている。

大阪　人権モデルは、主体者を育てる。20歳のころ、教室に、マスク、眼鏡、帽子を目深にかぶりやってきたひきこもりの青年が、生い立ちを綴る中で、いかに自分が社会的なことに縛られてきたかに気づいていった。また、人生でやっていないことに挑戦すると、「集会に行ったら発言する」ことを実践されている人がいる。そのことで自分に自信をつける取組だ。彼もその一人で、集会で発表後、今の願いは？と質問され、「就職したい」と答えた。そのとき、はじめて知った。ひきこもりの彼が、そんなふうに変わってきた。学習する中で、自分の権利を守る、他人の人権を尊重することを学ぶ。

熊本　高齢化とともに識字教室の参加者も先細りしている現実もあるが、これからもいろいろ取り入れていきたいと考えている。

熊本　熊本には、人権子ども集会というのがあるのだが、この会の中心メンバーとなっている高校生のおばあちゃんたちが識字教室に来ている。帰りにプリントをもって帰るのがうれしいと言われている。

三重　高齢となり夜でかけるのはむずかしいという声があり、昼の部も開催している。昼は月2回。夜は毎週だが、1～3週目は、それぞれ本人のやりたいことをしている。今日の報告者を、小学校1、2年の担任として幼いころから知っているが、友だちと面と向かって話すこともむずかしい子だった。勤務する学校は変わってもセンターの人と連絡を取り合い、今もつながっている。先生方には今目の前にいる子だけが対象ではないと考えてほしい。昼の部で行っている中学校3年生との交流では「差別をなくすためにどんな行動をすればいいか」聞かれて、識字で学ぶおばあちゃんが「今の気持ちを大事にしてほしい。死ぬまで勉強」と答えられていた。識字学級は、そんな力をもっている。

兵庫　今国の政策で夜間中学が全国に広がりつつあるが、全国に一気に広がることで、「生徒の姿から学ぶ」という識字学級で大切にしている姿勢は引き継がれていくのか危惧している。識字学級で大切にされてきた学習者のためになる夜間中学が広がっていくようにと願っている。

大阪　「息子が教師だけど、私は識字に行ってもいいか。小学校低学年から教えてほしい」と言われた方もいる。障害があり、目の動きで勉強されている人もいる。識字は読み書きの勉強だけではない。ぬくい、温かいところだ。

協力者　最後に報告者のみなさんから一言ずつ感想を述べていただきたい。

報告者（奈良）　たくさんの応援メッセージをいただきありがたい。私の周りにも「先生キライ」という人がいっぱいいた。でも、中友の活動をとおして、先生のことをスキになってきた。つながっていくことで、大好きな先生が増えた。これからも、学校で見る、地域で見る活動を大切につなげていきたい。

報告者（奈良）　今回のレポートで発信したかったのは、「先生もどうせ1年で出ていくんだろ」と子どもに言われ、子どもたちにそう思わせるだけのしんどさが学校にあり、自分一人でなんとかしようと頑張っていたけど、そんな自分が「助けて」「どうしたらいい」と周りに言えるようになり、つながり、仲間になったことで、それを子どもたちにも伝えていきたい。

報告者（宮崎）　昨日は自分のことでいっぱいいっぱいだった。他の方の報告や会場のみなさんの意見を聞く中で、識字教室で出会ったおばあちゃん、目の前にいる子どもたちなど自分の頭の中に思い浮かぶ顔がたくさんあった。

報告者（大阪）　1974 年教員生活をスタートしたのがここ加島。学校は荒れていた。私の部落問題がスタートした。副読本「にんげん」には北代さんの「夕焼けが美しい」が掲載されていた。人間の感性までをも奪うのが、字が書けないということだと感じ、常に思い出しながら進んでいる。

報告者（大阪）　私からは 3 つ。まず、識字学級の実態調査のため、訪問調査を行いたいのでぜひお声がけいただければ。次に、向野の新野さんは、いつも「集会では手を挙げて自分の意見を言う」を大切にされていた。私も、これからも自分が学んだことは実践しようと思う。最後に、識字は「みんなのもの」なので、だれかの経験も自分の中をくぐらせて考えてほしい。

報告者（大阪）　紙の報告だけ読んでいてもわからない全国各地のがんばる識字教室に直にふれられ

てよかった。
報告者（高知） 今回初めての発表。思い切って発表させてもらって気づいたのは、いくつになっても感動するし、学ぶことはできるということ。いろんな気づきをいただいた。
報告者（高知） 25年間識字をやってきて、もうそろそろ発表してもいいのではと思っての今回。身近な人が6年の間に3人亡くなったが、みんなの支えがあったからやってこれた。やっぱり識字はいい。これからも大好きな子どもたちと寄り添ってやっていきたい。
報告者（三重） しらさぎ学級をこれからもずっと自分が死ぬまで続けたい。思いをつなげていけたらと思う。差別の連鎖によって困っている子の純粋な心を部落差別によって汚さないように活動を続けていきたい。
協力者 今回もさまざまな部落差別の現状が語られた。つながれる仲間と居場所があることの大切さを再確認した。学校との連携、長く続く識字学級で変わったこと、変わらないこと、変えてはならないこと。生い立ちを振り返るには、信頼関係が必要なこと。信頼関係をつくるために何が行われているか、きちんとつながっていけているか。差別をなくすために頑張らないといけないのはだれなのか、自分の中にもあるときおりふっと顔を出す偏見を敏感に察知できるような感覚をいつもきちんともっていたいと思う。